

松本晃子(日本女大・院)

戦後最悪といわれる不況が続く中、衣料消費も低迷を続けている。その消費の実態に大きな変化がきているのではないだろうか。衣料品の国内生産は減り続け、輸入品が急増している。一方、家計の支出額に占める被服に対する支出額は1965年に10.0%であったのが1998年には5.4%と減少している。この衣料消費の構造的変化をみるために『全国消費実態調査』昭和49年版～平成6年版及び『家計調査年報』昭和54年版～平成6年度版より、年齢別、コーホート別の分析を行い、アイテム別の消費実態を検討すると、Tシャツやジーンズに代表されるカジュアル商品が消費の中でふえ、ブラウスやスカートといったエレガンスなアイテムが減少していることをが解った。(以後本論ではこの傾向を「カジュアル化」とする。)スカートの支出額(実質値)は、この10年間でどの年代においても著しく低下しているのに対し、スラックスはこの10年間で支出が特に増加している。

もう一方で、(社)衣料管理協会発行の『衣料の使用実態調査』から退蔵している衣料を数値的にみてもみると、ブラウス、スカートといったアイテムは嗜好性が強く、汎用性がないので退蔵されやすいといえる。逆にTシャツやジーパンといったアイテムは嗜好性も強くなく、使用頻度が高く、耐久性が続くところまで着続けるアイテムであり、補充の必要性があるアイテムであると解った。全体が低迷する衣料消費の中で需要が伸びているTシャツ、ジーンズは、すり切れるまで着るので買い換え需要は衣料品全体として少ないことになり、単価が比較的安いこともあり、全体的な衣料消費は伸びない要因となっている。では、将来的にはどうなるのであろうか。(株)JDSの『嗜好調査』からその傾向をみると「外出するときよくする服装」も、スラックスが増えているのに対しスカートは減少している。1996年を境にそのパーセンテージは逆転し、スラックスの汎用性が年々増していることが、このデータからも解る。衣料消費と退蔵の変化を追うことで、その方向性はさらにカジュアル化に向かうものと考えられる。